

第3回

# 光と影

～光を表す、影で表す～

美術教育監修・執筆

上野行一

特別な場合を除き、日常生活の中で光や影を意識して身の回りを見ることはまれだろう。風景や人物を絵に表すときにも、光がどこから差しているか、陰影の付き方はどうかなどはあまり気に留めない人も多い。今回は光と影という視点から、光と影から受ける印象、光による影のでき方、光と影に注目した表現について学ぶ。

学習前  
チェック!

- 画家や写真家はどのようにして光や影を効果的に用いているのだろうか。
- 光と影に注目して風景や人物、身の回りの物を見てみよう。
- カラヴァッジョ、レンブラント、フェルメールなどについても調べておこう。

## 光と影から受ける印象

光の方向によって陰影のでき方は変わる。その印象もまた変わってくる。顔を下からライトで照らせば影は不気味な印象になり、レンブラントのように影を極端に際立たせると凛々しい印象になる。

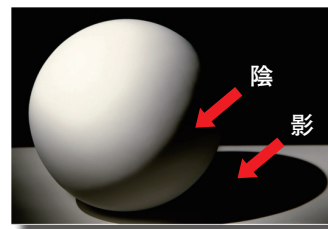
光と影から受ける印象そのものを描こうとした画家クロード・モネは、陰影にまで色を見だし、風景を色彩豊かに表現した。カラヴァッジョは光と影の対比を生かして、場面を劇的に演出した。フェルメールの柔らかな陰影の描写からは、光の穏やかさが感じられる。絵や写真で作品を制作するとき、光に意識を向けてみよう。新しい何かが見つかるかもしれない。

## 光と影の関係

光が差すと物には陰影ができる。物の表面の光が当たらない部分を「陰」、光を遮って物自体が作り出す形を「影」という。

金属や陶器など表面が滑らかなものは光をよく反射するので、光の当たった部分が反射して輝いて見えることもある。

デッサンのように物を立体的にとらえて描く場合には、光の当たり方や陰影に注目することが大切だ。



## 光と影の表現

今回の番組では、人工の照明による光と影から受ける印象や関係について学習した。自然光による風景や人や物を表現する場合には、対象を見つめて自分が感じ取ったこと、例えば光の新鮮な美しさなどを工夫して表すようにしたい。

光と物が出会うことで影が生まれ色が生まれる。

番組の第1回で紹介したように、時間によって変わる光と色に注目した画家クロード・モネは、朝の光（絵左）と夕方の光（同右）によって印象が変わる積みわらのある風景を描いた。



「積みわら-夏の終わり、朝の効果」



「ジヴェルニーの積みわら、夕日」

積みわらの影は青みを帯びた色や緑みを帯びた色で描かれており、すがすがしい朝の感じを与えている。もう一方は哀愁漂う夕方の感じを与える。モネは風景を包み込む光の空気感を表現しようとしたのだろう。このように普段見慣れているものを新たな視点でとらえ直して、自分の表したい主題を生み出すことが大切だ。